

# 園のくらしを育む 4

## 幼児とアート(2) — ものとアート —

秋田喜代美


### 1 紙テープの世界

保育園や幼稚園を訪問させていただくと、自然に心が弾んでくるのを感じます。それは、子どもたちのみずみずしい遊びやくらしの柔らかさに、喜びや驚きを感じるからです。そして、そこから知的な発見やひらめきがその場で生まれてくるからです。それらの中には、知識を膨らませてくれる経験と、これまでにはなかった見方を与えてくれる経験があります。後者の一つに、言葉の意味を改めてわかっていくことがあるように思います。

昨年九月、東京大学全学対象保育園の研修の関係で、アメリカのハーバード大学附属の六つの保育園を視察訪問しました。その時に出会った園での実践とその記録が、これ

までの私には充分になかった見方を与えてくれました。ピーボディ・テラス (Peabody Terrace) という保育園は、乳児が描いたなぐり描きやフィンガーペイントがていねいに額縁に入れて飾られていて、ドキュメンテーションの宝庫でした。子どもたちへの保育者の真摯なまなざしが映し出されることで、保育の空間が子どもと保育者の二重のアート空間になると感じました。そして、子どもたちの記録を長期間ていねいにとり、それを振り返って実践のレポートなどを書いておられました。保育者が書いた一つひとつのレポートが、保育学や教育学の古典的文献に関する教養に支えられ関連付けて深く考えて記されていたので、私は帰国後に何度もそのレポートを読み返しました。このような経験は、日本の保育者の実践記録では感じたことがないものでした。

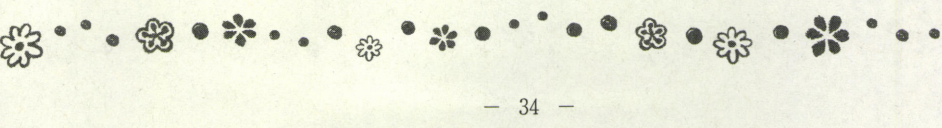
その一つに、紙テープの実践記録があります。五歳の男の子が色鉛筆で長い線をずつと引く張って描いていました。と、彼は周りを見渡して、棚にあった巻いてある黄色の紙テープを見つめます。そして、画用紙の上に線を引くのではなく、その紙テープを長く延ばしていきます。すると周りの友達もすぐにこの子の考えに気づき、端を持ってあげます。どんどん延ばしていくと廊下の端から端まで届きました。またほかの子が別の色の紙テープを持ち出し始めます。子どもたちが紙テープを使ってよいか保育者に了解を求めた時に、一度にこんなに使ってよいのかという思いが保育者の頭を一瞬よぎります。けれども、使用を肯定的に認めています。そこからさまざまな遊びが始まります。いろいろな色の紙テープを延ばしていくと、どれぐらいあるのだろうと長さを考える子



どもが出てきます。それらの紙テープを一緒に集めようということから、紙テープがころんがらがり丸まっています。それを子どもたちは「テープボール」と呼び始めます。そのテープボールから、ファンタジーが始まり、ごっこ遊びへと展開していきます。さらに、園のほかの年齢へもさまざまに活動が広がっていくことで、物語は続きます。実践記録ではなく、英語を日本語にした上にかいつまんでご紹介しているので、生き生き感が伝わらないかもしれないが私としては残念なところではあります。

## 2 人工物・ツール・サイン

紙テープは、本来、人がある必要性から考え出したものです。この意味で人工物（アーティファクト）です。飾る、縁取るなど、さまざまな意味をもって形成されたものです。それを子どもは廊下の長さを測る道具としても使います。これは紙テープの本来的な意味ではありませんが、子どもが考え出したツール（道具）だといえることができます。そして子どもたちはそこから、テープボールというものを偶然にして作り出し、新たな意味を子どもたち自身でつくり、そこからファンタジーの世界で遊びます。このテープボールは、遊びの世界で意味をもつサイン（兆表）として機能します。このように子どもは、先達の使い方を学んでいくと同時に、それを新たな道具として使ったり、またそれまでの見方や機能を離れたりすることで、自分自身の新たなサイン、自らある固有の意味世界をつくり出すことができます。そしてそれを仲間と共有し広げていくこともし



ています。これこそがアートであり、遊びの醍醐味になっていくだろうと思われま  
す。同じ一つのものがその意味や質をどのように変えていくのかを、この保育者は見  
つめて大事に記録にとり、そしてものにかかわる理論をもとにして論じていました。実践の中  
にはいろいろなものが記録されます。決められたことを決められたとおりに使うのでは  
なく、それがどのように一人の子どもの中で意味を膨らませていくのか、意味の世界が  
膨らむことで子どもたちの経験の質が深まる過程を描いていつています。

先日、東大本郷けやき保育園で二歳児が仲間と絵を描いているところを撮影したビデ  
オをカンファレンスで見ました。赤でリングを描いてから中を黄色に塗り、黄色いリン  
グと言っています。皮だけが赤いことをこの子はわかって、丸いリングの中を黄色にし  
ています。その丸を見ながら「リングシャキシャキ」と言って食べるまねをし、ぐるぐ  
る線を描くうちにリングは線路になってゆき、「シュツシュツ」と声を出して描いてい  
きます。と、その子はその画用紙を立ててその後ろにクレヨンの箱を置き、「ガタンゴ  
トン、ガタンゴトン」と言いながら身体表現を交えて机の上で画用紙列車を動かし始め  
ました。こうした姿はこの年齢にはよくあることですが、描く道具としての画用紙がサ  
インとしての列車に変化していく瞬間でした。ものの量がたくさんあることが豊かなの  
ではなく、ものへのかかわりの質の変化を経験していくことが豊かな経験となり、子ど  
ものアートを生み出すのではないのでしょうか。

(東京大学大学院教授)